

## 2. 「芋づる式」による 先行研究調査



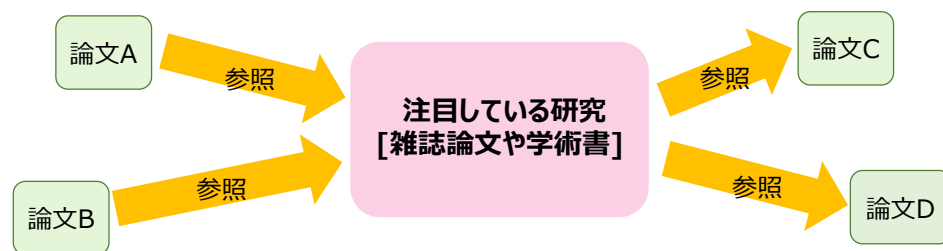
この章では、先行研究調査のアプローチのうちの1つ、「芋づる式」について詳しくみていきます。

# 芋づる式：“連なり”としての研究

## 研究は独立しては存在しないもの

これまでの研究の積み重ねがあって、新しい研究が生まれる

参照した先行研究は、**注や参考文献リスト**として明示するのがルール

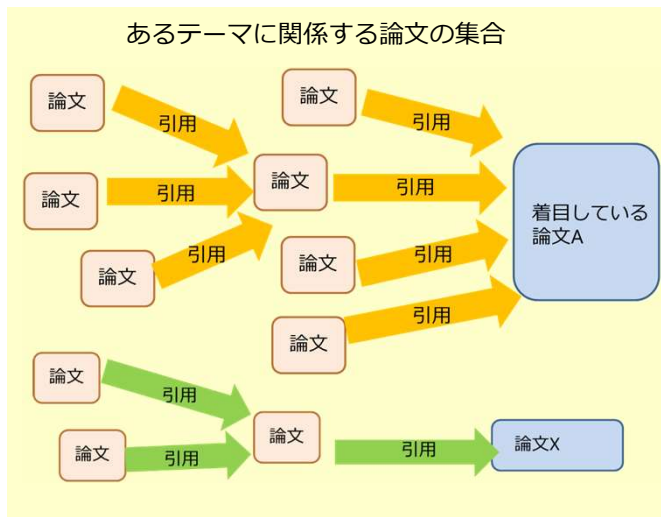


12

中央に注目している研究があります。その研究は他の論文の内容を参照したうえで行われています。そしてこの論文も次の研究に参照されていきます。このように研究とは独立して存在するものではなく、他の研究との連なりとして存在しています。

雑誌論文や学術書には、必ず参考文献リストというものがついています。他の文献を参照した場合には、参考文献リストとして明示する、というのが研究の世界のルールになっています。

## 芋づる式：強みとその限界



強み：

無駄無く、過去の関連研究へ遡ることができる

限界：

- ①文献リストに挙げられていない  
関連研究を見逃してしまう
- ②着目している文献よりも後に  
発表された論文は別に探索する  
必要がある

その研究のルールを踏まえて、注目している研究の参考文献リストから関連論文をさかのぼっていく、というのが芋づる式の基本的な調査方法です。

この方法は、研究の流れをたどりやすいというメリットがあります。スライドの図のように関連する過去の研究へとさかのぼっていただけますね。データベース検索では、どうしてもテーマと関係ない論文も混ざってきってしまうので、「芋づる式」は無駄のない調査方法であるといえます。

デメリットとしては、芋づる式だけに頼ると、参照関係に無い、他の関連文献を見逃す恐れがあります。

さらに、この方法では過去にしか遡ることができないので、自分が参照している論文より新しい論文については別途調査が必要です。

# 研究初期段階における芋づる式の活用法

## 新しい文献からたどる

基本的に、新しい文献はそれまでの研究を踏まえている

## 専門的なテーマの論文からではなく、基本文献からたどる

そのテーマを大きく俯瞰して研究史を整理したような基本文献からたどり始める  
ほうが漏れが少ない

専門的なテーマの論文の文献リストは、その論文で特に必要な文献に絞って  
まとめられている = 限られた範囲でしか芋づるをたどれない

どのような文献であっても、参考文献リストに掲載する文献の選別には、  
著者・編者の問題意識や評価が入ってきます。  
1つの文献からの芋づる式調査ではどうしても漏れが生じるので、  
複数の文献を併せて活用するようにしましょう。



14

研究の初期段階、すなわち、研究史を把握していく、という段階での、芋づる式活用法の基本ルールを2つ挙げます。

まず1つ目は、新しい文献を起点にする、ということです。

基本的には、新しい文献はそれまでの研究成果を踏まえているはずです。どの文献を起点にするか迷ったときは、より新しい文献からたどりはじめると良いでしょう。

2つ目は、専門的なテーマの論文ではなく、基本文献を起点にする、ということです。

専門的なテーマの論文の参考文献リストは、その論文にとって重要な専門的な文献に絞られていることが多いため、限られた範囲でしか調べられないことがあります。

テーマ全体を広く俯瞰し、研究史を整理した基本的な文献から調べ始めると、先行研究調査で漏れを防ぎやすくなります。

# 研究初期段階で起点とする基本文献

## 参考図書（事典・辞書・ハンドブック・便覧など）

各項目の解説中の参考文献⇒そのテーマの基本文献の可能性が高い

参考図書の中でも、専門家コミュニティで編集されているもの（学会名で編集されている、各項目ごとに専門家が分担執筆している 等）がオススメ

## 概説書・入門書

その分野の代表的な概説書・入門書に挙がっている参考文献

初学者向けの文献リストが用意されているものも



15

初めてそのテーマの先行研究調査を行うときに、芋づるの起点とするのにとくにお勧めなのが、このスライドに示すような文献です。

まず1つ目は、参考図書（事典・辞書など）です。調べたいテーマの基本文献を探す出発点になります。特に、専門家や学会などその分野の専門家によって編集されたものは、解説や参考文献の信頼性が高く、有用です。総合図書館A棟2階には参考図書コーナーがあります。一部はデータベースや電子ブックでも利用できます。

2つ目は、概説書や入門書は、その分野の基本的な知識を学ぶのに適した学術書で、教科書や参考文献として挙げられていることも多く、基本文献である可能性が高いです。初学者向けの読書案内が付いているものもあるため、有効活用できます。総合図書館では、A棟3階・4階の学習用図書エリアや新書コーナーに置いているものがあります。

# 研究初期段階で起点とする基本文献

## 専門書

専門書の序章などで、研究史の整理がされていれば起点として有効

## レビュー論文

そのテーマに関する文献を総覧・評価⇒多くの文献への起点となる

統一的な名称はないが、例えば「レビュー」「総説」「課題と展望」「現状と展望」「回顧と展望」といった論題が付けられている

雑誌によっては、定期的にレビュー論文が掲載されるものもある

16

基本文献としてさらに、専門書とレビュー論文について紹介していきます。

専門書は、内容が高度なので少し難しく感じるかもしれません。たとえば、最初の章、たとえば序章などに、これまでそのテーマがどのように研究されてきたか、いわゆる「研究史」を整理してくれていることがよくあります。その研究史の中で挙げられている文献を出発点にすれば、重要な文献を効率よく見つけることができます。専門書は、総合図書館のA棟3階・4階の学習用図書エリアのほか、より専門的なものはA棟5階の研究用図書エリアや書庫棟にもあります。

続いて、レビュー論文です。レビュー論文というのは、あるテーマについて過去の研究をまとめて紹介し、評価するタイプの論文です。ここから、多くの関連文献をたどることができます。タイトルに「レビュー」「総説」「課題と展望」「現状と展望」「回顧と展望」などといった言葉が含まれていることが多いです。学術雑誌の中には、定期的にレビュー論文を掲載しているものもありますので、そうした雑誌をチェックするのも一つの方法です。

とはいえ、「どの文献を起点にすればいいか」を見極めるのは、初めて研究に取り組む人にはなかなか難しいことです。まずは自分で候補を探してみて、そのうえで、よりよい出発点がないかどうか、指導教員の先生にアドバイスをもらおうとよいでしょう。初学者の段階を過ぎて研究が進んできたら、注目した文献を手がかりに、関連する文献を自分なりに取捨選択しながら探していく、「芋づる式」

の調査ができるようになります。